

# 神津島産黒曜石製の両面加工石器

— 関東・中部における縄文時代草創期後半の石器研究 —

橋本 勝雄

## はじめに

縄文時代草創期後半には、神津島産黒曜石を用材とした両面加工の石器（尖頭器）がある。本県でも、芝山町香山新田中横堀（空港No.7）遺跡と市原市姉崎台遺跡の出土例について、すでに近藤敏によってその概要がまとめられている（近藤2003）。

関東では、このほか神奈川県でも関連遺跡が散見されるが、遺跡分布は箱根・愛鷹山麓に集中しており極めて地域色が濃い（第1図）。

残念ながら、これまで資料的な制約のため十分な検討が行われてこなかったが、近年、箱根・愛鷹山麓では、第二東名や東駿河湾環状道路の建設に伴う発掘調査によって資料数は増加の一途をたどっている。

ついては、本稿ではこの地域の調査成果を踏まえて、当該資料に関する再検討を図る。また併せて、同時期の半月形石器を含む東北頁岩製両面加工石器群との関係にも言及したい。

## 1 関連遺跡

### (1) 関東

箱根・愛鷹山麓を中心とした分布域の東側に位置し、関連遺跡は散漫に分布する。

千葉県の芝山町香山新田中横堀遺跡（西川1987）・市原市姉崎台遺跡（近藤2003）、神奈川県秦野市砂田台遺跡（宍戸ほか1989）・平塚市向原遺跡（市川1992）・同原口遺跡（長岡2002）がこれに該当する。

香山新田中横堀遺跡では、「半月形の両面石器または半月状のナイフ」が1点出土している（第2図）。

当該資料は、左右非対称な半月形を呈し、基部が欠損、先端部付近は片側に湾曲し、刃線は丸みを帯びる。大きさは長さ10.6cm、幅3.8cm、厚さ1.4cm、重さ60.2gを測り、東北地方の半月形石器に比べ肉厚な印象は否めない。素材は全面的に加工されているため判然としないが、大型剥片と推定される。先端と二側縁にみられる周辺加工は基本的に交互剥離で、剥離面は比較的平坦である。最終剥離面は先端部であり、この部分

はナイフの刃先に相当する。母型（preform）の製作に関わる剥離面が中央部と先端部の側縁に部分的に残されており、この部分には磨耗痕が観察される。特に器体中央部の稜線（凸部）付近が顕著である。基部は整形後に折損しているが、剥離面の状態から円基に近い形態に復元できる。

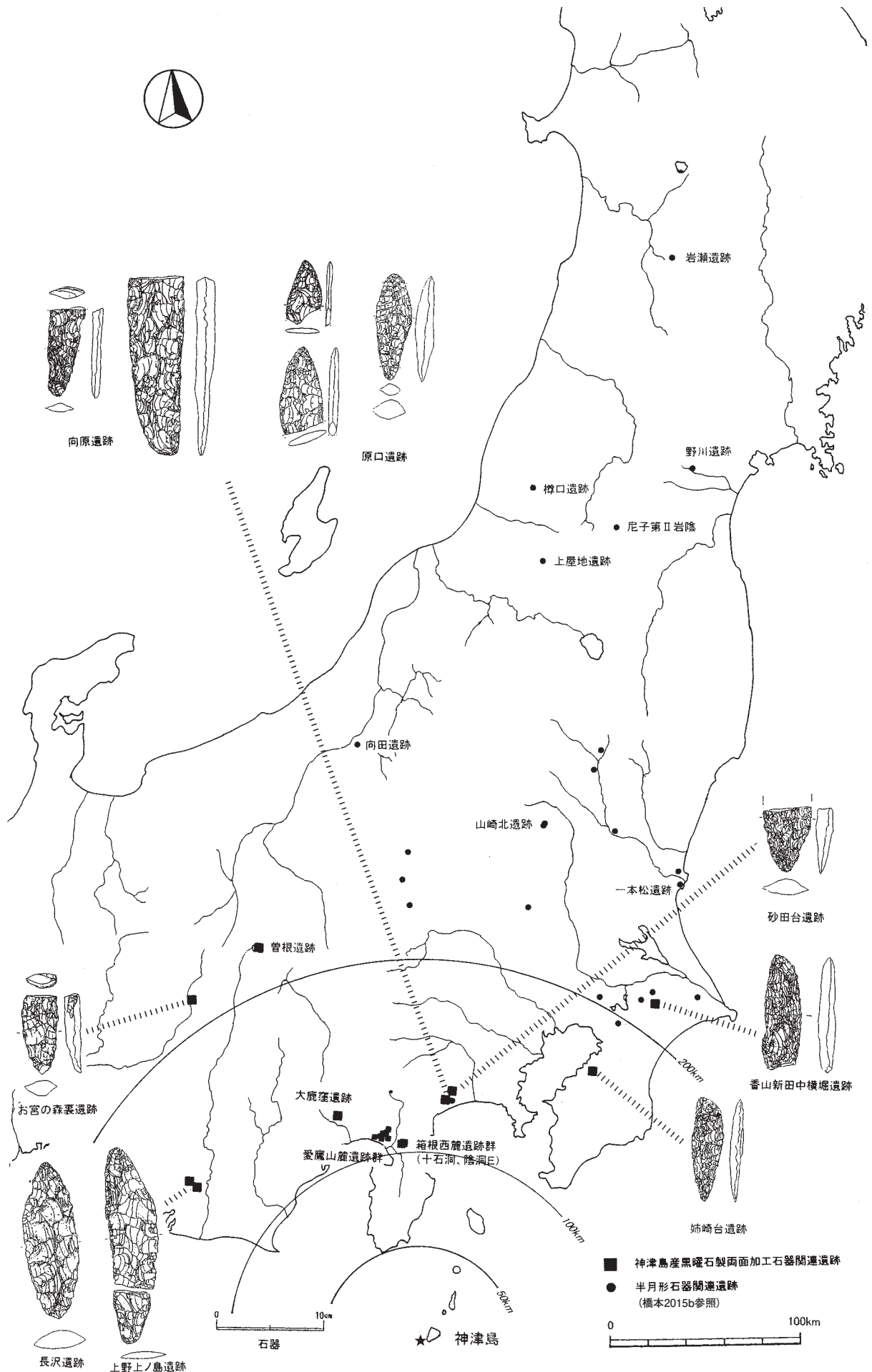
なお、東京学芸大学の二宮修治の蛍光X線分析による産地推定では、神津島産黒曜石との結果が得られている（二宮・島立2001）。

姉崎台遺跡でも、肉厚の「半月形石器」が1点採集されている（第2図）。完形で大きさは長さ9.6cm、3.0cm、厚さ1.1cm、重さ30.6gを測る。左右非対称な半月形を呈し、基部が尖頭状、先端部付近は中横堀例と同様に、片側に湾曲し刃線は丸みを帯びる。また素材は、大型剥片と推定される。表裏とも周辺加工の痕跡がみられるが、特に表面が著しい。最終剥離面は先端部である。母型の剥離面には磨耗痕が観察され、周辺加工による剥離面との差異は明瞭である。

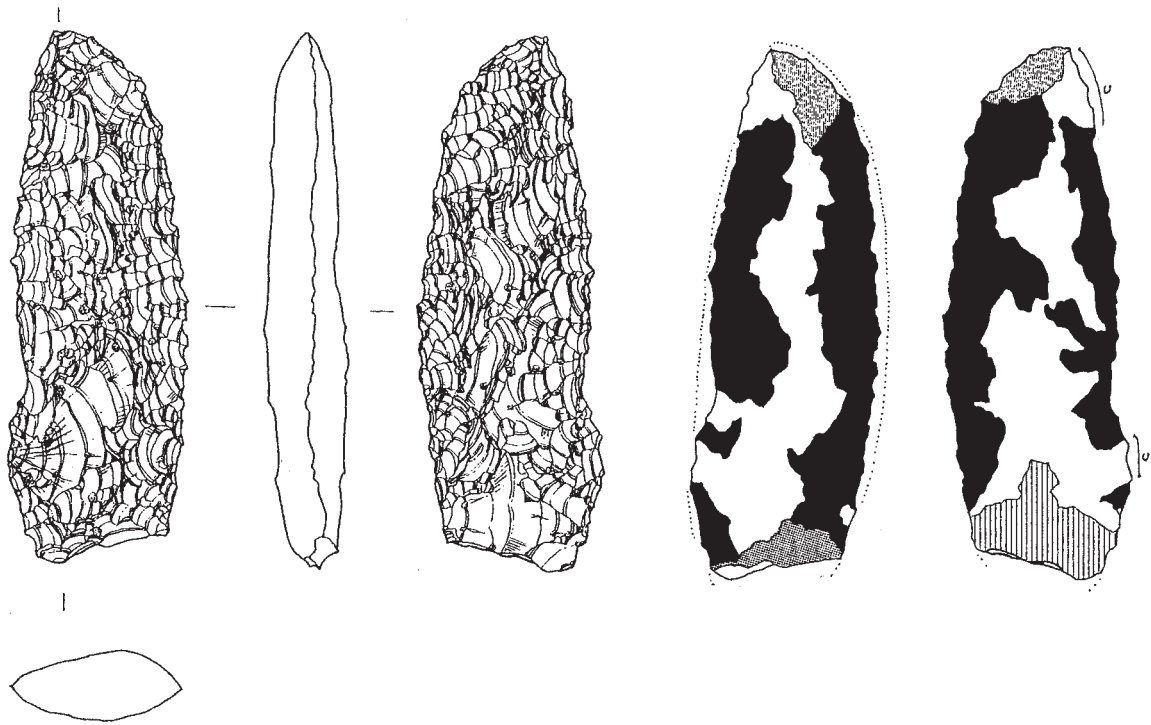
なお、池谷信之の蛍光X線分析による産地推定では神津島産黒曜石とされている。

砂田台遺跡では、発掘調査に伴い「尖頭器」1点が採集されている（第5図）。欠損品であり全体の形状不明である。大きさは長さ6.0cm、幅4.5cm、厚さ1.5cm、重さ32.58gを測る。表裏の中央部には母型の剥離面を若干留め、その中央部稜線付近には磨耗痕もみられる。肉眼的には神津島産黒曜石の可能性が高い。

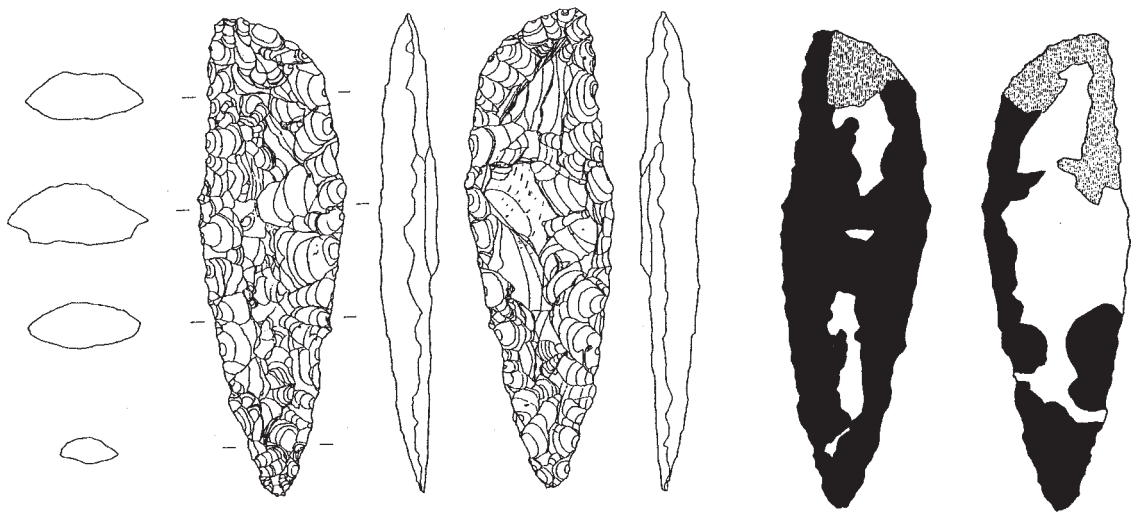
向原遺跡では「半月形石器」の残欠が2点出土しており、蛍光X線分析による産地推定では神津島産黒曜石との結果が得られている（第5図）。両者の平面形は近似しており、側縁の一方が直線、他方が緩やかな弧を描く。類例を考慮すれば、いずれも母型の一部の可能性が高いが断定はできない。大きさは第5図10が長さ8.3cm、幅3.3cm、厚さ0.9cm、重さ25.7g、第5図11が長さ16.4cm、幅5.2cm、厚さ1.9cm、重さ150.8gを測る。10には右側縁の上端にガジリ、表裏に磨耗痕、11の表裏の中央部稜線付近には磨耗痕がみられる。



第1図 神津島産黒曜石製両面加工石器関連遺跡分布図



1 香山新田中横堀(空港No.7)遺跡



2 姉崎台遺跡

0 (2/3) 5cm

- ▨ 第一次剥離面
- 母型の剥離面(古)
- 母型の剥離面(新)
- 周辺加工(古)
- ▨ 周辺加工(新)

第2図 関連資料① (香山新田中横堀遺跡・姉崎台遺跡)

原口遺跡は向原遺跡の東側に隣接する(第5図)。ここでは「②温室エリア谷部の小支谷の緩斜面」に集中域があり、ここから神津島産黒曜石製尖頭器が8点出土した。うち1点には扁平・薄手の両面加工尖頭器を母型として、表裏の側縁に細部加工が施されている(第5図7)。他7点は比較的分厚い両面加工の尖頭器である。注目すべきことに集中域からは、東北頁岩製半月形石器が1点出土している(第5図1)。当該資料の平面形は左右非対称であり、左側縁が直線状、右側縁が弧状を呈する。下半部が欠損し先端部にはガジリがみられる。大きさは、長さ6.0cm、幅3.1cm、厚さ0.6cm、重さ10.58gを測る。扁平で薄手の両面加工尖頭器を母型として、表裏の周辺部にはほぼ全周にわたって細部加工(交互剥離)が施されている。通常の尖頭器の断面形は凸レンズ状を呈するが、それとは明らかに異なるものである。

報文でも指摘されたように、他時期の遺物(有舌尖頭器)が混在しており、一括性が若干危惧されるが、共に縄文時代草創期後半の所産であり、両者は共存した可能性が高い。なお、ここでは爪形文と刺突文の土器も各1点出土している<sup>1)</sup>。

## (2) 中部・東海

静岡県と長野県に関連遺跡が所在する。静岡県は箱根西麓遺跡群(三島市十石洞遺跡(寺田1990)・陰洞E遺跡(芦川・池谷1994))、愛鷹山麓遺跡群(裾野市佛ヶ尾遺跡(野田・成田2007)、長泉町鉄平遺跡(笹原・吉村2003)・桜畑上遺跡(中村2010・伊藤2009)・富士石遺跡(中村2012)・東野遺跡(柴田2014)・茶木畑遺跡(足立1985)、沼津市清水柳北遺跡・葛原沢第IV遺跡・築地鼻北遺跡(坂本1985)・拓南東遺跡(高尾1998)・西洞遺跡(池谷2002、三好・柳澤2012)・淵ヶ沢遺跡(岩本ほか2013)・イタドリA遺跡(壬生・鈴木2009)・中見代第I遺跡(高尾1988)・中見代第III遺跡(高尾1989))、富士宮市大鹿窪遺跡、浜松市上野上ノ島遺跡・長沢遺跡の20か所、一方、長野県は上松町お宮の森裏遺跡、諏訪市諏訪湖底曾根遺跡の2か所がこれに該当する。

### ①箱根・愛鷹山麓の遺跡群

大半が単独出土である。資料に一括性があり、検討に堪える遺跡は、清水柳北遺跡(関野ほか1989・1990)、葛原沢第IV遺跡(池谷2001)、大鹿窪遺跡(小金澤ほか2003・2006)に留まる。

清水柳北遺跡では、東尾根地区から石器が尖頭器18

点、篋状石器8点、石鏃24点、有舌尖頭器17点、搔器2点、削器12点、植刃3点、不定形石器10点、楔形石器16点等、土器は絡条体圧痕文を主体として171点出土した(第3図)。遺構は5か所の集中地点(1号～5号ブロック)が検出され、そのうち1～3号ブロックが押圧縄文期、4・5号ブロックが次期の撚糸文期に位置づけられている。石器群については、その大半は第2号ブロックにかかわるものとされている。

1は左右非対称形で断面が扁平であり、半月形石器の一種と考えられる。2～7は尖頭器。意図的な折断(両極打法等)が顕著である。2は薄手であり、比較的透明度が高い黒曜石が使用されている。3～4の折断には両極打法が駆使されている。4は被熱資料であり、5の下端部には傾斜打面の一部が残存している。

6は厚手で右肩に1条の彫刻刀面がある。表面には自然面と第一次剥離面、裏面には主要剥離面と打面の一部が残存しており、未成品の可能性がある。7は意図的に折断されており、折れ面の裏側中央部に打撃痕がみられる。基部が最終剥離面となっており、丸く整形されている。8は篋状石器であり、肉厚の尖頭器を母型として上下両端を細かく加工している。9～16は石鏃、17・18は楔形石器、19は尖頭器を母型とした削器、20は両極剥片素材の削器であり、いずれも神津島産黒曜石が用いられている。

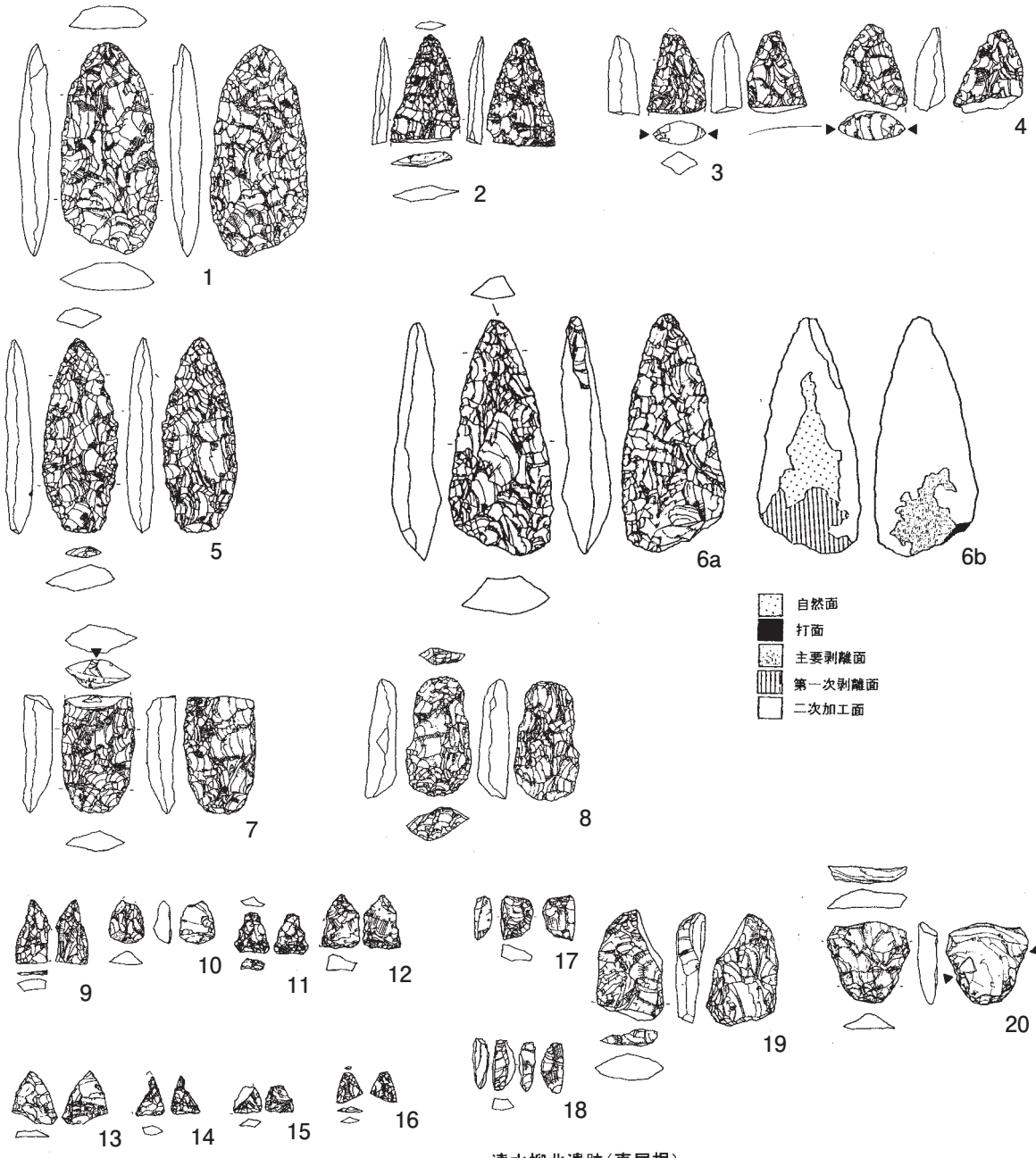
以上の資料から、関野哲夫が言うように、尖頭器を母型として、篋状石器、削器などを製作し、併せてその過程で生じた剥片から石鏃、楔形石器等の小型剥片石器を製作したことが窺える<sup>2)</sup>。

葛原沢第IV遺跡では、押圧縄文期以前の遺構は住居址1軒、土坑2基、炉穴1基、焼土址3か所、配石址1か所が検出されている。このうち押圧縄文期は第1号住居址、第1号炉穴、第2号・第3号焼土址である(第3図)。

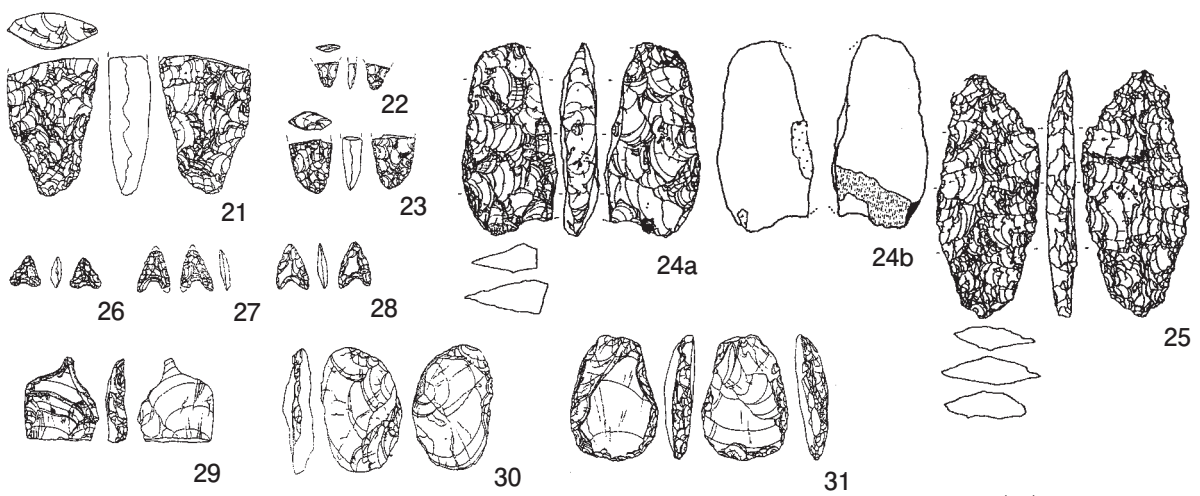
ここでは一括性が見地から基本的に第1住居址出土石器を取り上げる。第1号住居址からは尖頭器8点、石鏃12点、石錐1点、削器4点、篋状石器1点、石核2点、磨石1点、石皿1点が出土した。清水柳北遺跡東尾根2号ブロックと同様に押圧縄文土器と肉厚の黒曜石製の尖頭器が出土し、これに石鏃・篋状石器が伴っている。

21～23は黒曜石製の尖頭器の破片である。21には下端部に基部整形の痕跡があり、これが最終剥離面となっている。折断面にバルブはみとめられず意図的な折断か否か不明である。26～28は石鏃である。石材は



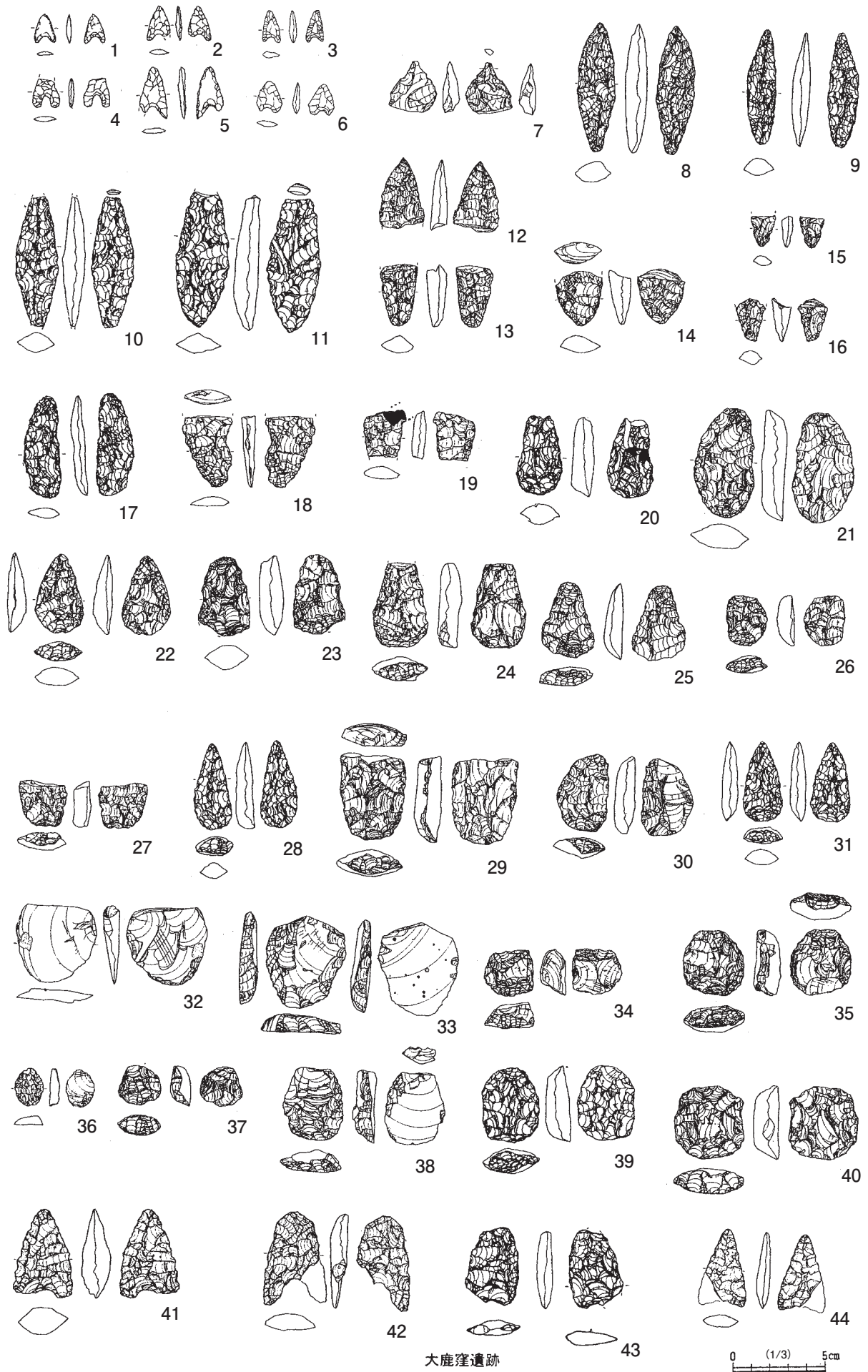


清水柳北遺跡(東尾根)



葛原沢第IV遺跡

第3図 関連資料② (清水柳北遺跡・葛原沢第IV遺跡)



第4図 関連資料③ (大鹿窪遺跡)

チャート(26・27)と富士川ホルンフェルス(28)、流紋岩、珪質頁岩があり、黒曜石製のものはない。29は珪質頁岩製の石錐、30は搔器、31は両刃の篋状石器で、共に富士川ホルンフェルス製である(柴田2002)。この他、図示しなかったが、尖頭器の破片を利用した石核と楔形石器が各1点ある。用材はいずれも神津島産黒曜石である。

第1号住居址以外では、第1号配石址(24)と遺構外出土(25)の尖頭器が重要である。24は自然面と素材剥片の打面・主要剥離面の一部が残存している。25は完形で平坦な剥離で覆われている。平面形は左右非対称で側縁は鋸歯状である。薄手で透明度の高い黒曜石が用いられている。尖頭器の用材となった黒曜石については望月明彦による蛍光X線分析によって神津島産であることが判明している。このように葛原沢第IV遺跡では、清水柳北遺跡と異なり、石鏃、搔器に神津島産黒曜石は用いられていない。削器も神津島産は5点にすぎず、神津島産黒曜石は篋状石器と尖頭器に限られる。

大鹿窪遺跡の縄文時代草創期は隆起線文期と押圧縄文期に大別されるが、このうち当該資料は押圧縄文期の遺構から出土している(第4図)。

当該期の遺構は堅穴状遺構11基(1号～7号、9号、11号・12号、14号)、土坑9基(44号～51、53号)、焼土跡2基(1号・2号)、配石遺構7基(1～5号、9号、11号)、集石遺構13基(1号～13号)である。

石器組成は石鏃(1～6、41～44)、石錐(7)、尖頭器(8～16)、半月形石器(17・18)、両面加工石器(19)、篋状石器(20～31)、削器(32)、搔器(33～40)、石匙、楔形石器、磨石、敲石、石皿、打製石斧、礫器、石核、剥片類、有溝砥石、台石で構成される。

この中では、礫石器の登場が特徴的である。報告者の小金澤保雄は、このことについて、「矢柄研磨器や篋状石器・不定形石器以外は典型的な縄文時代中期に見られる石器組成であることが最大の特色である。」と評している(小金澤2006)

石鏃には剥片素材の通常の大きさのもの(1～6)と両面加工石器を母型とした大型例(41～44)がある。いずれも凹基無茎鏃であり、41～43は形態が不整形であることから石鏃の未成品の可能性が高い。類例として陰洞E例(第6図16)がある。通常の大きさの石鏃が富士川ホルンフェルスはじめとした非黒曜石の在地石材を主体としているのに対して、大型例は神津島産黒曜石に偏っている。大型例のうち41・42は厚手、

43・44は薄手である。

尖頭器は対称形で肉厚である。折断頻度が高く、刺突具に特有の衝撃剥離や再加工の痕跡はみられない。したがって、全てとは言わないものの、その多くが篋状石器や大型石鏃の母型に供されたようである。

半月形石器と両面加工石器は薄手の破損資料であり、大型石鏃あるいは石匙の母型の可能性が高い。

篋状石器は両面加工石器を素材としている。二次加工の進度による平面形態の変異が著しく、中には、34・35、39・40のような搔器様のものもある。基部の形状には尖基(22、25、28、31)と円基(21、23、26、30、34・35、37、39・40)があり、尖基は肉厚な尖頭器を折断後、折断面に刃部を作出しているのに対して、円基の資料には刃部が上下両端に形成されている。このうち21、34・35については刃部が錯向剥離となっている。搔器・削器は剥片素材でありホルンフェルスや珪質頁岩等の非黒曜石が重用されている。

ついでながら、この他、8号堅穴状遺構出土の尖頭器は、これまで時期不明とされてきたが、当該資料については、神奈川県愛甲郡清川村北原遺跡第I文化層(市川ほか1998)との技術形態学的な共通性が窺われる。

北原遺跡では、大鹿窪遺跡と同一規格のガラス質黒色安山岩製の狭長な尖頭器が出土しており、これに無文土器が共伴している。当該資料は相模野第V期の典型例であり、この成果を援用すれば、8号堅穴状遺構出土の尖頭器は隆起線文期以前の無文土器の時期に帰属することになる。

すなわち大鹿窪遺跡では、縄文時代草創期の始めから終わり(無文→隆起線文→押圧縄文)まで、ほぼ途切れることなく生活の痕跡がみとめられるのである。

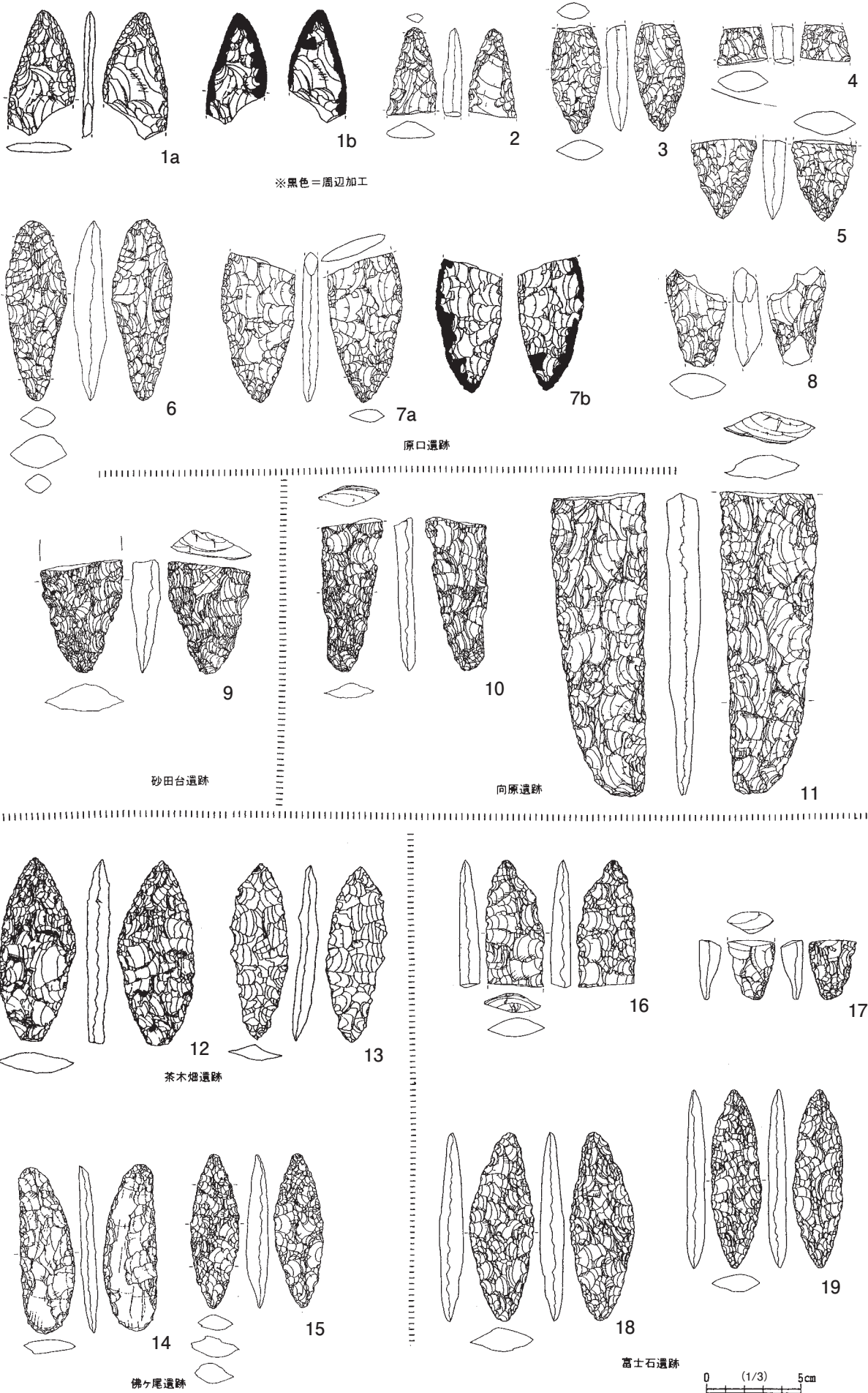
## ②周辺地域の遺跡(第6図)

静岡県長沢遺跡と上野上ノ島遺跡はいずれも採集品である(安達1970)。

前者は、長さ14.4cm、4.9cm、厚さ1.7cmを測る。調整はやや粗く肉厚な両面加工の尖頭器である。「石質は漆黒黒曜石であるが、器面に気泡がみられ、あまり良質ではない。」後者は長さ18cm、4.5cm、厚さ0.7cmを測る。左右非対称形の半月形に整形されている。調整剥離面が中央部を超え、薄手に仕上げられている。形状は向原例に近い。石材は「青味がかかった漆黒色の黒曜石」とのことであり、神津島産黒曜石の可能性が高い。

長野県上松町お宮の森裏遺跡では遺構外から1点出





第5図 関連資料④ (原口遺跡ほか)



土している(新谷ほか1995)。大きさは長さ6.6cm、幅3.1cm、厚さ1.2cm、重さ24.24gを測る。欠損品で、折れ面と一条の槌状剥離面が共存している。この痕跡は刺突具に特有の衝撃剥離と考えられる(御堂島1991・橋詰2009)。池谷信之は、石材は神津島産黒曜石(「青を含む半透明の黒曜石」)であり、絡条体圧痕文土器に伴うものとしている(池谷1996)。

このほか詳細は不明であるが、及川穰によれば、長野県諏訪市諏訪湖底曾根遺跡でも同種の資料が出土しているという(及川2014)。

## 2 神津島産黒曜石製の両面加工石器の特質

### (1) 遺跡

遺跡は箱根・愛鷹山麓を核として南関東、中部・東海に分布する。分布域は黒曜石原産地から直線距離で約200km、箱根・愛鷹山麓を基準とすると約100km圏内となっている。

子細にみれば神津島から約100km～150km圏内に箱根・愛鷹山麓の遺跡群、長沢遺跡・上野上ノ島遺跡、原口遺跡をはじめとした相模野の遺跡、150km～200km圏内に姉崎台遺跡、200km超には、お宮の森裏遺跡、曾根遺跡、香山新田中横堀遺跡がある。

ちなみに神津島から伊豆半島の南端まで約50km、御前崎や房総半島南端まで約100kmの距離がある。むろん遺跡の大小や単に距離と方向だけでは判断できないが、ひとつの目安となろう。分布密度は最も神津島から至近距離の箱根・愛鷹山麓において濃密であり、大鹿窪遺跡では堅穴状遺構11基をはじめとした縄文草創期の遺構群が検出されている。

これらの遺跡では剥片石器に留まらず礫石器も多い。これに対して150kmを超えると、単独出土であり、まとまった資料はみられない。また、姉崎台遺跡や香山新田中横堀遺跡の資料が示すとおり周辺加工が、より顕著にみられる。

### (2) 遺物

#### ①形態分類

当該資料は尖頭器を基調とした石器群であり、母型の形態から、以下のとおり二つの形態に区分される。

**第Ⅰ類：**厚手・狭長の両面加工尖頭器を母型とするもの。厚さは概ね1cm以上である。

図示した中では、香山新田中横堀遺跡、姉崎台遺跡、砂田台遺跡、原口遺跡(第5図2～6、8)、茶木畑遺跡、佛ヶ尾遺跡、富士石遺跡(第5図17～19)、桜畑上遺

跡(第6図3・4)、鉄平遺跡、東野遺跡(第6図9)、西洞遺跡(c・d区)、築地鼻北遺跡、清水柳北遺跡(第3図3～5)、葛原沢第Ⅳ遺跡(第3図21～23)、大鹿窪遺跡(第4図8～16)、長沢遺跡、お宮の森裏遺跡がこれに該当する。

基本的に平面形は左右対称形であり、器体の折断を経て、篋状石器(東野遺跡(第6図10)、拓南東遺跡(第6図15)、中見代第Ⅰ遺跡(第6図7)、中見代第Ⅲ遺跡(第6図8))、大鹿窪遺跡(第4図20-31、34・35、37、39・40)、厚手の半月形石器(清水柳北遺跡(第3図1)、香山新田中横堀遺跡、姉崎台遺跡)、及び大型石鏃(大鹿窪遺跡(第4図41・42))が製作されている。衝撃剥離はお宮の森裏例(折れ+彫器状剥離)と西洞遺跡c・d区(彫器状剥離)に限られ少数である。第Ⅱ類：薄手・幅広で非対称形の両面加工尖頭器を母型とするもの。厚さは概ね1cm未満である。

図示した中では原口遺跡(第5図7)、向原遺跡、十石洞遺跡、陰洞E遺跡、佛ヶ尾遺跡(第5図15)、富士石遺跡(第5図16)、桜畑上遺跡(第5図1・2)、イタドリA遺跡、西洞遺跡Ⅱ、淵ヶ沢遺跡、清水柳北遺跡(第3図2)、大鹿窪遺跡(第4図17・18)、上野上ノ島遺跡がこれに該当し、このほか佛ヶ尾遺跡にはガラス質黒色安山岩製の「半月形両面体」(第5図14)、大鹿窪遺跡(第4図43・44)と十石洞遺跡(第6図16)には大型石鏃がある。

母型は葛原沢第Ⅳ遺跡(第3図24・25)が典型であり、用材には透明度の高い黒曜石が多い。第Ⅰ類に比べ母型からの変形度が低く、衝撃剥離もみられない。

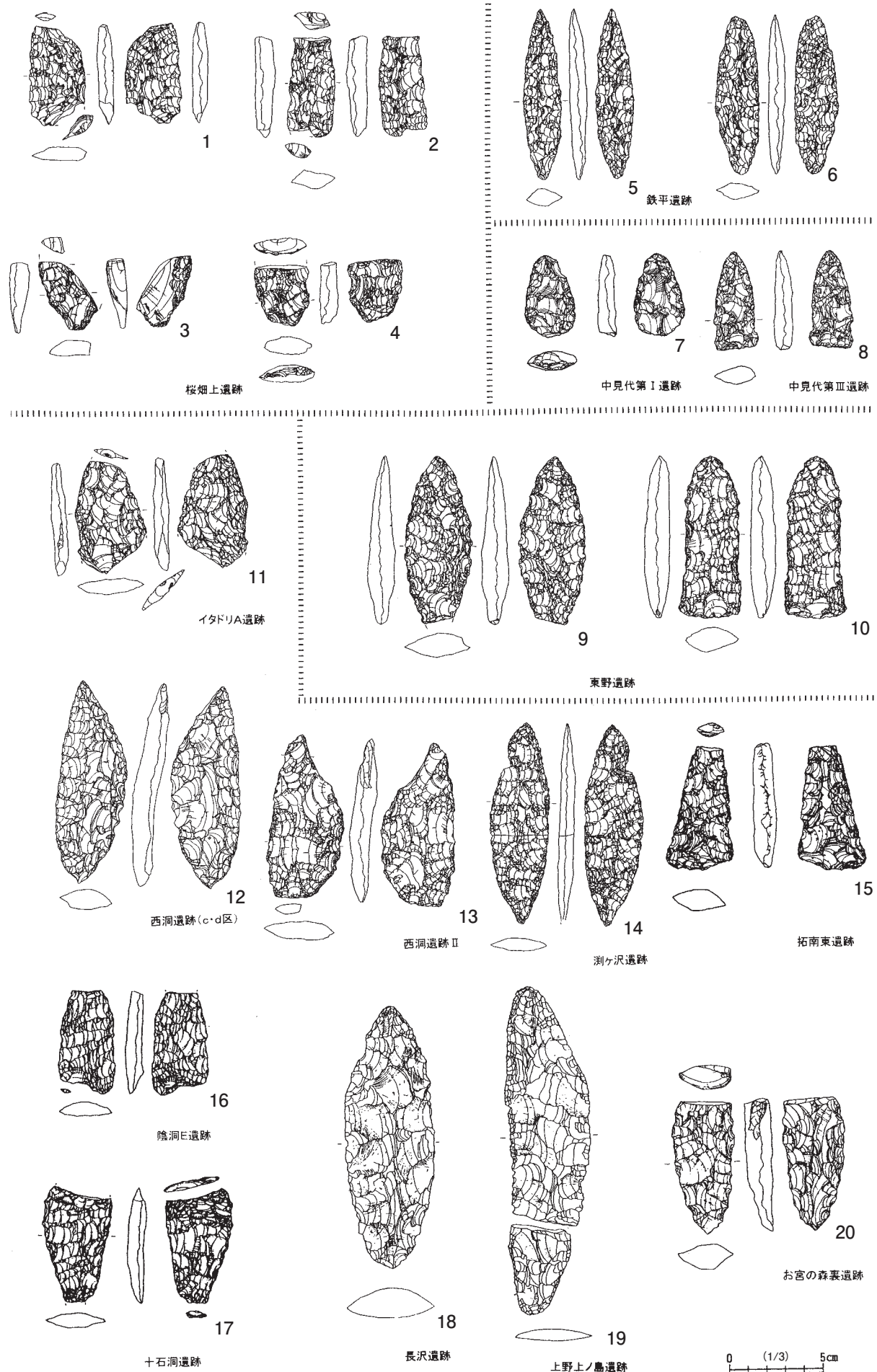
#### ②製作技術

尖頭器を母型として複数の石器を製作し、併せて、素材の生産をも担う技術は、清水柳北遺跡、葛原沢第Ⅳ遺跡、大鹿窪遺跡の良好な一括資料により復元されてきた。

これらの遺跡では、折断された尖頭器(blank)をもとに篋状石器や削器が製作され、その途上で生じた剥片は石鏃・楔形石器の素材に供されている。

尖頭器の折断の際には、第Ⅰ類については両極打法が多用され、時として器体中央部への打撃による折断もみられる(第3図7)。これに対して第Ⅱ類には両極打法や打撃痕は、特に観察されなかった。このことから、これらの技術は厚さに応じて行使されていたものと推察される。

第Ⅰ類は篋状石器や搔器、第Ⅱ類は半月形石器や削器に加工されており、厚さに応じた製作目的の違いが



第6図 関連資料⑤ (桜畑上遺跡ほか)

みられる。特に篋状石器の素材は例外なく肉厚の第Ⅰ類である。

製作工程に関連して、池谷信之は、「神津島への渡航のコストやリスク、原石から尖頭器への石材の減少率などを考慮すると、個々の遺跡内に黒曜石原石が持ち込まれた可能性は低いとみておきたい。おそらく神津島ないしその近海域で製作されたブランク<sup>3)</sup>」が集落内に持ち込まれ、器種の需要に応じて、削器や篋状石器への変形が行われた」と主張している(池谷2001)

筆者は、現状では、池谷の見解を基本的に支持したいが、清水柳北遺跡では、母型の素材剥片(報文第454図65・66)、また、今回、清水柳北遺跡や葛原沢第Ⅳ遺跡では母型(尖頭器)の未成品(第3図6・24)、を確認した。後者については、図示したように表面に自然面、裏面に主要剥離面の一部が残存している。

これらの事実から、母型のほかに原石が本土に持ち込まれた可能性も浮上する。神津島産黒曜石の搬入形態の解明は、どうやら一筋縄ではいかないようである。

### ③ 装備

装備としては、両面加工の尖頭器を母型とした両面加工石器(篋状石器、半月形石器、大型石鏃)のほかに、剥片素材の搔器・削器・石鏃・石錐・石匙、磨製石斧、打製石斧、有溝砥石、礫器、磨石類、石皿、台石がある<sup>4)</sup>。

これらは大きく剥片石器と礫石器に大別されるが、一部地域とはいえ、礫石器(礫器、磨石、敲石、石皿、台石)の登場が当該期の大きな特徴である。

特に、大鹿窪遺跡ではその傾向が顕著であり、住居跡等の遺構の検出もあいまって、あたかも本格的な定住が始まったかのようである。

しかしながら、この見解には直ちに賛同はできない。まず関連遺跡は、総じて分布密度が低く、小規模である。また、北方系細石刃石器群と同様に、両面加工石器を母型とする当該石器群は可搬性に富むものといえる。したがって、全体的には、その集団的性格はやや遊動的であったものと推定されるのである。そもそも堅穴住居跡等の遺構の検出は、大鹿窪遺跡、清水柳北遺跡、葛原沢第Ⅳ遺跡に限られ、愛鷹山麓以外では確認されていない。端的に言えば、おそらく、これらの3遺跡は局所的環境に適応した生業形態の違い(遺構と礫石器の有無)を反映しているのであろう。

### 3 東北頁岩製両面加工石器群(半月形石器)との交差

さて、神津島産黒曜石製の両面加工石器と期を一にして、東北地方を中心として半月形石器を含む両面加工石器群が登場し、関東においては両者の分布域が交差している(第1図)。

注目すべき事例として、先述のとおり神奈川県原口遺跡がある(第5図)。原口遺跡は分布域の南限に位置しており、ここでは東北頁岩製半月形石器(第5図1)と神津島産黒曜石製尖頭器の一群(第5図2~8)が共存している。

東北地方で半月形石器が登場した縄文草創期後半の気候は寒冷な新ドリラス期にあたり、両面加工石器による石器製作(岩瀬遺跡、野川遺跡、仙台内前遺跡A地点)が登場する。これらの遺跡では、両面加工石器はもとより、製作途上で生じた剥片をスクレーパー、篋状石器、石鏃などの利器の素材としている(鹿又2007)。半月形石器もその技術体系に組み込まれており、関東・北陸への東北頁岩製石器群の広域移動に関連づけることが可能である。

半月形石器の関連遺跡の分布は、東北・北陸・関東に限定され、資料数も少ないが、基本的に関東には、東北地方から完成品として搬入されている。したがって、消費地の関東地方から出土した資料は、製作地の東北地方、例えば石器生産跡で失敗品が顕著な岩瀬遺跡で明らかにされなかった、完成品の本来の姿を指し示している可能性が高い。また単独出土を基本とするが、このことは、さしずめ多機能・多目的な当該資料の機能的性格を表しているのであろう。結果として、東北が製作跡・貯蔵、複合遺跡、未成品・失敗品であるのに対して、関東は消費地、単独出土、完成品というキーワードで対比される。

このような東北地方の両面加工の尖頭器を母型とした効率的で、可搬性に富む石器製作スタイルと装備は、神津島産黒曜石製の両面加工石器に相通じる。その点では神津島産は東北頁岩の模倣との言い換えも可能である。

これまで、当該資料と東北地方の両面加工石器群との関係性は夢想だにされなかったが、このことは東北方面と中部・東海をつなぐ関東の状況、すなわち、関東における東北頁岩製半月形石器の存在に対する不十分な認識に起因するものと考えられる(橋本2015b)。



## おわりに

従来、当該資料については、神津島産黒曜石、両面加工尖頭器、肉厚、押圧縄文期がキーワードであったが、今回の検討により、新たに薄手、半月形石器が加わることとなった。しかしながら、研究はまだまだ緒についたばかりである。さらに、消長の背景、製作地と石材原産地の探求など今後に残された課題も多い。特に、神津島産黒曜石の使用の背景については、今のところ謎というほかはない。

なお、文中に記した東北頁岩製の両面加工石器群については、別稿に記したので、御併読いただければ幸いである（橋本2015）。

## 謝辞

本稿を草するにあたり、以下の方々から多大な御指導御協力を賜りました。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

近藤敏、萩野谷悟、森嶋秀一、島立桂、前嶋秀張、保竹貴幸、原田雄紀。

芝山町教育委員会、市原市埋蔵文化財調査センター、神奈川県埋蔵文化財センター、沼津市文化財センター、富士宮市埋蔵文化財センター。

## 注

- 1) 報文第606図・607図参照（長岡2002）。
- 2) 報文第443図1の「石槍」（珪質凝灰岩製）については、報告者は縄文草創期前半としているが、筆者は形態の特異性から縄文時代前期の両尖ヒ首の一種と捉えている。
- 3) 池谷の「ブランク」は本稿の「母型」に相当する。  
ちなみに、本稿では文中にも示したように、折断以前の尖頭器を母型（preform）、切断された状態の尖頭器をブランク（blank = 未完成）とした。
- 4) 尖頭器については折断率の高さと衝撃剥離の低率を考慮すれば、基本的に母型であって利器としての使用の可能性は低い。

## 引用参考文献

- 芦川忠利・池谷初恵 1994 『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡 I・II グランフィールドズC・Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書』 三島市教育委員会。
- 安達厚三 1970 「石器の製作工程と機能に関する覚え書 - 静岡県天竜市発見の大型尖頭器」『古代文化』22-5 pp.111-115 財団法人 古代学協会。
- 足立順司 1985 『茶木畑遺跡 田方学区新設高校敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書』。
- 池谷信之 1996 「愛鷹・箱根山麓の縄文時代草創期の遺物」『静岡県考古学会シンポジウムIX 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年収録集』 pp.123-127 静岡県考古学会・シンポジウム実行委員会。
- 池谷信之 2001 『葛原沢第IV遺跡（a・b区）発掘調査報告書 I

- 縄文時代草創期・縄文時代 -』沼津市教育委員会。
- 池谷信之 2002 『西洞遺跡（c・d区）発掘調査報告書』沼津市教育委員会。
- 市川正史ほか 1992 『向原遺跡II』神奈川県立埋蔵文化財センター。
- 市川正史ほか 1998 『宮ヶ瀬遺跡群XV 北原（No.10・11北）遺跡 宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査』（財）かながわ考古学財団。
- 伊藤和彦ほか 2009 『桜畑上遺跡 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 岩本貴・柴田亮平・木村忠義 2013 『湖ヶ沢遺跡（第二東名No.27-1地点）- 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財センター。
- 及川穰 2014 「日本列島における出現期石鏃の型式変遷と広域連動」『物質文化』94 pp.53-73 物質文化研究会。
- 角張淳一 2006 「石器」『大鹿窪遺跡 窪B遺跡 - 県営中山間地域総合整備事業袖野の里ほ場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - （遺物編）』 pp.182-187 芝川町教育委員会。
- 鹿又喜隆 2007 「更新世末から完新世初頭にみられる人類の環境適応 - 東日本の事例から -」『宮城考古学』第9号 pp.1-20 宮城考古学会。
- 小金澤保雄ほか 2003 『大鹿窪遺跡 窪B遺跡 - 県営中山間地域総合整備事業袖野の里ほ場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - （遺構編）』 芝川町教育委員会。
- 小金澤保雄ほか 2006 『大鹿窪遺跡 窪B遺跡 - 県営中山間地域総合整備事業袖野の里ほ場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - （遺物編）』 芝川町教育委員会。
- 近藤敏 2003 「姉崎台出土の石器について」『市原市文化財センター研究紀要IV』 pp.1-3 （財）市原市文化財センター。
- 佐伯秀人・小笠原永隆ほか 1992 『- 千葉県富津市 - 前三舟台遺跡』財津郡市文化財センター。
- 坂本眞美 1985 『築地鼻北遺跡発掘調査概報』沼津市教育委員会。
- 笹原千賀子・吉村たまみ 2003 『鉄平遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 穴戸信吾・上本進 神奈川県立埋蔵文化財センター 1989 『砂田台遺跡I』神奈川県立埋蔵文化財センター。
- 柴田徹 2002 「愛鷹山麓出土石器の石材鑑定 - ホルンフェルス（頁岩）の偏光顕微鏡下の観察から -」『西洞遺跡（c・d区）発掘調査報告書』 pp.215-223 沼津市教育委員会。
- 柴田亮平ほか 2014 『東野遺跡II 第二東名No.143地点 旧石器時代~縄文時代草創期編』静岡県埋蔵文化財センター。
- 新谷和孝・神村透・角張淳一・渡辺誠・村田広司 1995 『お宮の森裏遺跡発掘調査報告書』上松町教育委員会。
- 鈴木次郎 1996 『宮ヶ瀬遺跡群VI サザランケ（No.12）遺跡』財団法人かながわ考古学財団
- 関野哲夫ほか 1989・1990 『清水柳北遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会。
- 関野哲夫 1990 「静岡県東部地方における縄文草創期前半の石器について - 愛鷹山麓の最近公表された資料 -」『縄文時代』1 pp.168-181 縄文時代文化研究会。
- 高尾好之 1988 『土手上・中見代第II・第III遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会。
- 高尾好之 1989 『中見代第I遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会。
- 高尾好之 1998 『拓南東遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委

員会。

寺田光一郎 1990 『十石洞遺跡－新設中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』 三島市教育委員会

長岡文紀ほか 2002 『原口遺跡Ⅲ 縄文時代（第2分冊 本編2） 農業総合研究所建設に伴う発掘調査』（財かながわ考古学財団）。

中村雄紀 2010 『桜畑上遺跡Ⅰ（旧石器時代～縄文時代草創期編）』（財静岡県埋蔵文化財調査研究所）。

中村雄紀 2012 『富士石遺跡Ⅱ 第二東名No142地点 旧石器時代（A T上位）～縄文時代初頭編』 静岡県埋蔵文化財センター。

西川博孝 1987 「第3章 A地点の調査」『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－No.7遺跡－』（財千葉県文化財センター）。

二宮修治・島立桂 2001 「自然科学的手法による分析－蛍光X線による房総半島出土尖頭器石器群の黒曜石原産地推定－」『千葉県文化財センター 研究紀要22』 pp.65-100（財千葉県文化財センター）。

野田正人・成田修一2007『佛ヶ尾遺跡 第二東名No147地点第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書裾野市－1』（財静岡県埋蔵文化財調査研究所）。

橋詰潤 2009 「『刺突具』利用の変遷に関する一試論－新潟県域における杉久保石器群から縄文草創期の比較から－」『新潟県の考古学Ⅱ』 pp.39-58 新潟県考古学会。

橋本勝雄 2014 「本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器、そして移行期の石器編年」『シンポジウム 時代の変革と石器の変遷－旧石器から縄文石器へ－ 予稿集』 pp.56-67 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会。

橋本勝雄 2015 a 「移行期における東北頁岩製石器群の関東への南下」『斬新考古』第3号 pp.31-33 北海道考古学研究所。

橋本勝雄 2015 b 「移行期の半月形石器と両面加工石器群－茨城県大洗町一本松遺跡出土の資料から－」『茨城県考古学協会誌』第27号 茨城県考古学協会（印刷中）。

壬生亮輔・杉山和徳 2009 『イタドリA遺跡・イタドリB遺跡・イタドリC遺跡 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。

御堂島正 1991 「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』92 pp.79-97 早稲田大学考古学会。

三好元樹・柳澤利枝 2012 『西洞遺跡Ⅱ 第二東名No8地点 旧石器時代・縄文時代編』 静岡県埋蔵文化財センター。